

八幡宇佐宮もう一つの謎

岡 部 富久市

一、はじめに

神作著の『八幡宇佐宮御託宣集』は不思議な文献である。宇佐宮のことを考える上では欠くことのない重要な資料とされている。しかし、その中には「伝承」や多くの飛躍的表現が含まれているので知的分析による真相の解明にはなじまない面もなくはない。「伝承」が史実をありのままに伝えるものでないだけに、しばしば無視されたり、あるいは軽視されたりするのである。しかし、ドイツの考古学者シュリーマン（一八二二—一八九〇）の例もあることを忘れてはならない。「伝承」が史実を投影していることも事実である。従って、「伝承」を多く含む神社の草創についての「託宣集」や「縁起」の類に対して、「一として信頼に値するものなきが如し」（宮地直一著『八幡宮の研究・春日神社の研究』蒼洋社）とレットルをはられてしまうと、甚だ困るのである。科学知識の未発達な原始・古代の人々の認識の仕方は、近・現代人のそれとは大きく異なるものであることを考えると、彼等の残したメッセージに対しては慎重な検討がなされなければならない。フランスの哲学者ベルグソン（一八五九—一九四一）は知的認識の限界を認め、分析、比較、概念化をせずに、直観によりストレートに対象に迫ることを教えている。

『託宣集』に限らず、直観の発動による「伝承」の認識は、また新しい「風景」の発見に大きな可能性を開くことになる。だが、直観によって得られた認識はその内容を客観化することが出来ないため、知的分析の立場からは批判があることも事実

である。要は、真相の解明のためには二つの方法のバランスが不可欠となるのではなからうか。とは言うものの、二つのバランスを欠いた中で誕生したこの私の小稿は流産的試論となつてしまつたかもしれない。

二、八幡宇佐宮もう一つの謎

政治的混乱と深刻な社会不安の中でご心労が多かつた聖武天皇を勇気づけたものの中に豊前国宇佐宮の「御託宣」があつた。聖武天皇の大仏建立に当たつて、八幡宇佐宮は次のような「託宣」を下した。

天平十九年丁亥、使を宇佐宮に遣し、此の願を成就せらるべき由、大菩薩の御前に於て、宣命を捧げて祈りもうさしむ時、神託きたまはく。

・神吾、天神地祇を率いざなひて、成し奉つて事立て有らず。銅の湯を水と成すがごとくならん。我が身を草木土に交へて、障へる事無く成さんてへり。

・一に伝く。

・吾國家を護ること、是れ猶楯戈のごとし。神祇を唱へ率ゐて、共に知識と爲つて、必ず皇帝の願を成し奉らむてへり。

天平十九年丁亥。遣使於宇佐宮。可被成就此願之由。於大菩薩御前。捧宣命令祈申之時。神託。

・神吾神吾、天神地祇天神地祇率率伊佐奈比伊佐奈比天。奉成天事立不有有。銅湯銅湯水水上上成成。我身遠交草木土我身遠交草木土天。無障事無障事久成久成。佐佐率率者。

・一伝。

・吾吾護國家護國家。是是猶猶楯楯戈戈。唱唱率率神祇神祇。共共余余為為知識知識。必必奉成皇帝之願奉成皇帝之願者。

タイミングを外さない「託宣」は、神慮とは言え驚くばかりである。遠隔の豊前国宇佐に鎮座しながら中央政界の動向を正確にキャッチするには有力な情報源がなければならぬ。換言すれば、中央の有力貴族との結託があったはずである。そして、そのために要したカネ（経済力）も莫大であったに違いない。正確な情報収集には莫大なコストがかかることは今も昔も異なるところはない。果たして、八幡宇佐宮はそうした莫大な財源を何に求めたのであろうか。宇佐宮のドル箱はどのようなものであったのだろうか。八幡宇佐宮が富裕な莊園領主となり特権的地位を確立するのは朝廷からのゆるぎない尊崇を獲得してからのことである。草創期の八幡宇佐宮の経済力について、貧乏性の私は特に気にかかるのである。

三、八幡宇佐宮のドル箱

聖地御許山（馬城峰）から一直線に天空高くかけ上がると、前方には豊前海が目に入る。眼下、右手には馬城峰の山並みが、速見郡山香町方向へ走っているのが見える。この延々と続く山並みの下には、かつて、金（江戸時代には馬城金山）、錫、鉛、硫黄などの豊かな地下資源が埋蔵されていた。この山並みは、豊前、豊後を通じて地下資源の宝庫であった。加えて、『豊後国風土記』は、速見郡の西北に「赤湯泉」が存在していたことを伝えている。

赤湯泉（在二郡西北）此湯泉之穴在二郡西北竈門山一。其周五許丈。湯色赤而有_レ泥。

用_レ足_レ塗_二屋柱_一。泥_ニ流出_レ外變爲_二清水_一指_レ東下流。因曰_二赤湯泉_一。

「赤湯泉」の正体は「真朱」であり、極めて重要な鉱物であった。この「赤湯泉」の赤色の正体は、酸化鉄や酸化マグネシウムと考えられてきたが、松田寿男氏による実地調査の結果、その成分が硫化水銀であることが証明された。⁽³⁾

ところで、八幡宇佐宮と関係の深い大神比義の居館があったとされる、日出町大神、旧速見郡大神村がある。その速見郡大

神村から「赤湯泉」までは距離にして約一五kmである。大神比義は何故、この地に居館を置いたのであろうか。この点については後に述べる。ついでながら、この速見郡大神から別府湾を一望できるところに大分市坂ノ市丹生がある。『豊後国風土記』のいう「豊後国丹生郷」のことである。『統日本紀』文武二年（六九八）の条に「豊後国真朱」とあるのはこの「丹生郷」の真朱をさす、と考えられている。ここで産する「真朱」（朱砂）は、朝廷から献上を命じられた程の全国的ブランドであった。大神比義が真朱（朱砂）を産する「赤湯泉」や、朝廷に献上するほどの名品を産した「豊後国丹生郷」と指呼の間にある速見郡大神村に居館を置いた理由とは何であつたのであろうか。⁴⁾

さて、話しを再び天空に戻すことにする。馬城峰上空から左手に視線を走らせると、彼方に福岡県田川市の香春岳が見える。香春岳については、『豊前国風土記』の逸文に次の記述が見られる。

昔者、新羅国神、自度到来、住_二此河原_一。便即、名曰_二鹿春神_一。又、郷北有_レ峰。頂有_レ沼。周川六步許。黄楊樹生。兼有_二竜骨_一。第二峰、有_二銅并黄楊竜骨等_一。第三峰、有_二竜骨_一。

右記の史料から、香春岳は新羅系の渡来人によって開発されていたことがわかる。察するところ、彼等は鉱山開発に卓越した知識と技術を有したハイテク集団であつたらしいのである。彼等によって精錬加工された製品は当時の全国的物流過程にせられ、巨大な経済的利益をもたらしたにちがいない。⁶⁾

因みに香春岳は、黄銅鉍の他にも、黄鉄鉍、磁鉄鉍、含金石英脈など豊富な地下資源を埋蔵していた。

四、小倉山之麓 菱形池辺の奇瑞について

『託宣集』の「巻五」に語られている「奇瑞」は、実に怪異である。

金刺宮御宇二十九年戊子。筑紫豊前国宇佐郡菱形池の辺、小倉山の麓に鍛冶の翁有り。奇異の瑞を帯び、一身と為て、八頭を現す。人聞いて実見の為に行く時、五人行けば即ち三人死し、十人行けば即ち五人死す。故に恐怖を成し、行く人無し。是に於て大神比義行きてこれを見るに、更に人無し。但し金色の鷹、林の上に在り。丹祈の誠を致し、根本を問ふて云く。誰か変を成すや、君の為す所かと。忽に金色の鳩と化り、飛び來つて袂の上に居る。爰に知りぬ。神変人中を利すべしと。然る間、比義五穀を断ち、三年を経るの後、同天皇三十二年辛卯二月十日癸卯、幣を捧げ、首を傾けて申す。若し神為るに於ては、我が前に顕るべしと。即ち三歳の少兒と現れ、竹の葉の上に於て宣ふ。辛国の城に、始て八流の幟と天降つて、吾は日本の神と成れり。一切衆生左にも右にも、心に任せたり。釈迦菩薩の化身なり。一切衆生を度むと念ふて神道と現るなり。我は是れ日本人皇第十六代誉田天皇広幡八幡麻呂なり。我名をば、護国靈験威力神通大自在王菩薩と曰ふ。国々所々に、跡を神道に垂るてへり。

金刺宮御宇二十九年戊子。

筑紫豊前国宇佐郡菱形池辺。小倉山之麓。有鍛冶之翁。带奇異之瑞。為一身現八頭。人間之為実見行時。五人行。即三人死。十人行。即五人死。故成恐怖。無行人。於是大神比義・見之。更無人。但金色鷹在林上。致丹祈之誠。問根本云。誰之成変乎。君之所為歟。忽化金色鳩。飛來居袂上。爰知神変可利人中。然間比義断五穀。經三年之後。同天皇三十二年辛卯二月十日癸卯。捧幣傾首申。若於為神者。可顯我前。即現三歲少兒、於竹葉上宣。

辛国乃城、始天八流之幟天。吾者日本神上成神。一切衆生左毛右毛任心。釈迦菩薩之化身。一切衆生遠度牟念天神道止現也。我者是れ日本人皇第十六代誉田天皇広幡八幡麻呂也。我名名曰護国靈験威力神通大自在王菩薩布。国々所々に、垂跡於神道置者。

右記の怪異な光景は、当時の人々が直接目撃したものを見たとおりに、彼等自身の「ことば」で表現したものであった。それは、次の三つの光景に要約される。(1)「金色鷹」「金色鳩」の怪事(2)「五人行。即三人死。」「十人行。即五人死。」の

変事(3)「鍛冶之翁」の出現。

科学知識の未発達な時代の人々によって目撃された怪異な光景も、現代人の視点からはおよそ次のように理解されるであろう。

即ち、小倉山之麓菱形池辺には水銀製造工場があり、水銀アマलगム法による塗金(メッキ)加工が行われていた。そこでは「五人行。即三人死。」という怪事件が発生していたが、これは水銀製造過程から発生する猛毒の水銀ガス(亜硫酸ガス)による被害者の光景であった。そして、その水銀製造工場の中心には、全体を指揮、監督する、鉾山開発や金属文化に精通し当時のハイテクを駆使する渡来系の人物がいた。

人里を離れ、豊かな水にも恵まれた小倉山之麓菱形池辺は、錬金術工場としては最適な場所であった。菱形池辺の錬金術工場へは、馬城峰山系からの金鉾石、「赤湯泉」や豊後国海部郡丹生郷の「真朱」(朱砂)が運び込まれていた。また、近くの海岸や川辺からは大量の砂鉄が採取され、タタラ製法による製鉄も盛んに行われていたと考えられる。そして、香春岳採銅所の経済的利益が莫大であったように、菱形池辺の錬金術工場からもそれに勝るとも決して劣ることのない経済的利益がもたらされていたのではなかったか。



宇佐市 宇佐神宮菱形池

なお、菱形池辺の「奇瑞」と深いかかわりのあった大神比義について、「託宣集」はその相貌を「仙翁」のようであったと記している。通説は彼を道教に精通していたシャーマンであった、としている。道教の修行者は「不老不死の探求が最大のテーマであったから、彼等の行う錬金（丹）術は、多種類の鉱物や動物、植物を複雑に調合し、不老不死の「仙薬」を作ったのである。中でも水銀はよく利用されたので、水銀の製法には精通していた。おそらく、大神比義も不老不死の「仙薬」調合の過程で水銀製造の秘法を会得していたものと思われる。あるいは、ハイテクの所有者辛島氏からその know how を伝授された可能性もなくはない。いずれにしても、大神比義は水銀をはじめ鉱物の精錬冶金の技術に通じていたと考えてよい。

ところで、八幡大神は、七十二年、居所を菱形池辺から鷹居瀬社へと移した。ところが、この移遷の地に於いても、菱形池辺と同様の変事が発生していたことを『託宣集』は伝えている。曰く「五人行。忽三人殺。十人行。忽五人殺。」と。（『弥勒寺建立縁起』には「五人行。三人殺。二人生。十人行。五人行。五人生給。」とある。）『託宣集』は、恐るべき変事が二か所で生じたことを伝えている。以上の変事を単に「神話」と、片付けてしまつては「奇瑞」の真相に迫ることは難しいのである。なお、こうした変事が生じた六世紀から七世紀にかけては、仏教の伝来（五三八年）や、それに伴う造寺・造仏の気運の高まりがあった。また、同時に、朝鮮半島情勢の急変（六六〇年百濟滅亡）などあり、渡来系の人々が多数来朝し、わが国では国内の鉱産資源開発が重視されるようになった時期でもあった。

蛇足ではあるが、「凶首塚」（所在地 北宇佐字百太夫）について。

六世紀から七世紀、あるいは六〇〇年代後半につくられたとされる「凶首塚」は、単人の乱（七二〇）に於いて討伐された単人の霊を鎮めるために造られたものとされている。しかし、「凶首塚」の築造時期と単人の乱は時間的に矛盾があり、これをめぐっては諸説がある。六世紀から七世紀といえ、菱形池辺や鷹居社に於いて怪異な出来事が発生していて、多くの死者を出していたことを『八幡宇佐宮御託宣集』や『弥勒寺建立縁起』は伝えている。「凶首塚」と二つの変事の間に関係がある

のかないのか、私には大変興味深いのである。

さて、これまで「水銀」に関する記述が多かったことから、ここで改めて「真朱」と「水銀」について簡単に見ておきたい。真朱（朱砂）は、その鮮赤色から呪術的、装飾的（塗付用材）として重用された。即ち、古墳内部の装飾や、神社仏閣、官庁街の主柱。主壁に朱砂がもちいられたのである。具体的には奈良時代の春日大社、興福寺の五重塔、阿修羅像などは朱に輝いていた。おそらく、宇佐宮も創建当時（七二五年）には朱に塗り込められていたと考えられる。（その真朱は「赤湯泉」や豊後丹生郷からのものであったと思われる。）真朱から採られた水銀は、金の精錬やメッキの用材として重要であった。水銀_工（硫化水銀）は、「真朱」・「朱砂」を熱し、気化した水銀を別の容器に回収して取得する。以上のことを化学式で示すと次の通りである。 $HgS + O_2 \parallel Hg + SO_2$ Hg は真朱、 SO_2 は亜硫酸ガスである。 SO_2 は空气中に飛散し、 Hg （水銀）が残るのである。 SO_2 が猛毒であることはいうまでもない。

水銀が他の金属と合金を造ることが容易である性質を利用して金の精錬や仏像の塗金に用いられる。先ず黄金精錬法としては、雑鉱（鉱石）の中から金のみを取得するため水銀に雑鉱を混入する。金は水銀に溶解し、金アマルガムとなる。熱を加えると水銀は気化し、後に金が残りを取得するのである。次に水銀が塗金に用いられる場合である。水銀に金を混ぜるとアマルガム（液状）となる。これを仏身に塗布し熱すると水銀は気化し、後に金が張りついた状態で残る。その代表的例が奈良大仏に見ることが出来る。『東大寺大仏記』によると、銅約四四九トン、錫約八・五トン、金約四四〇kg、水銀約二・五トンなどであった。なお、『東大寺大仏供養記』には、「黄金ありといえども、水銀なければ即ち仏身成りがたし」と、水銀の重要性を強調している。

しかし、その反面では、真朱（硫化水銀）から水銀を取得する時や、仏像・仏具に塗金を施す時には必ず大量の有毒ガス（亜硫酸ガス）が発生するということである。東大寺大仏の塗金に当たっては、多大の毒ガスによる被害者を発生させたという。

五、大神氏と水銀

大神比義をはじめ大和三輪山にルーツをもつ大神氏には、水銀の「におい」がつきまとう。例えば、奈良時代の万葉歌人の一人、大神朝臣奥守や豊後大神氏の祖、大神惟基についてもそれが言えるのである。

大神朝臣奥守については、万葉集(五)(3841)に「仏造る真朱足らずは 水たまる池田朝臣が鼻の上を掘れ⁹⁾」という歌がある。彼については殆ど知られていないが、わずかに天平宝字八年正月(七六四)、正六位下から従五位下に任じられていることが判っている程度である。歌の意味は、「仏造る」というのは、東大寺大仏の造立を指しており、「真朱足らずは」とは、大仏を塗金するための水銀、つまり真朱から取得された水銀がたりなければ、という意味である。この一首から判ることは、実際に真朱を採掘する庶民の東歌ならいざ知らず、従五位下という高官の大神朝臣奥守の歌であることを思うと、真朱や水銀に対する彼の並々ならぬ関心の深さが伝わってくるのである。

次に大神惟基は、祖母山の銅、錫、銀などの鉱産物と並んで、白杵深田や三重内山の豊富な水銀を支配し、巨大な富を蓄積した一一世紀初めの鉱山開発者であった。そして、その莫大な経済力は、白杵磨崖仏へと結実したのである。大神惟基については後に詳述される。

六、豊後大神氏の出自について(二つの学説)

大神惟基は豊後大神氏の祖とされるが、その出自をめぐっては怪異な「姥岳神婚伝承」を残すのみである。怪異なその伝承とは、母が姥岳(祖母山)の大蛇神と交わって彼が誕生した、というものである。学者、研究者は、この伝承の霧を拭い去り、豊後大神氏の真のルーツに迫ろうと苦心してきた。その結果、現在二つの有力な説がある。

一つは中野幡能氏の豊前宇佐大神氏の豊後移入説¹⁰⁾であり、他の一つは、松岡実氏の大神良臣説¹²⁾である。

中野幡能氏の説とは、奈良時代の終わり、宇佐宮大宮司職を独占し、強大化した宇佐氏に圧倒され、下級神官となった大神

氏が宮外に出て、一一世紀初め、豊後大野郡緒方郷へ移入し、その流れを汲む者の中から大神惟基が出現したとするものである。これに対して、松岡氏の説とは、豊後大神氏の出自を豊後介大神朝臣に求めるものである。渡辺澄夫氏は、右記二つの説を検討された上で両説について、有力な学説であることを認めつつも「今一つ、きめ手を欠いている」と述べているところを見ると、両説以外の第三の仮説の必要なことを暗示されているように思われる。

私は、渡辺氏とはまた異なった観点から両説には納得しかねるのである。先ず、宇佐大神氏の豊後移入説に関しては、臼杵磨崖仏との関係でいささか疑問が残るからである。通説によると、臼杵石仏は平安時代後期には既に完成しており、その石仏群の発願者は豊後大神氏であった、とされている。通説に立って宇佐大神氏の豊後移入時期（一一世紀初め）を考えると、宇佐大神氏にとって、造仏に要する莫大な経済力の確保は困難ではなかったか、という疑問である。大野郡に於ける宇佐宮莊園からの収入をそれに充てた、とする説も聞くが、この説はリアリティに乏しい感がある。逃避的に豊後に移入した大神氏としては、自らの経済的基盤の確立こそ急務であったと考えられ、造仏への出費などの余裕はなかったと思われる。また、仮に莫大な経済力を造仏に注入していたとすると、経済力の蓄積は不可能となり、以後の豊後大神氏の活躍はなかった。次に、造仏の動機に関しても疑問がある。よく指摘される、宇佐宮との対抗し造仏を執行した、とする説は臼杵石仏群の造立場所から判断すると、極めて不自然な印象を拭いきれない。閉鎖的、秘密防衛的環境は、造仏の目的とは合致しない。以上の点から私は、宇佐大神氏の豊後移入説には納得がいかないのである。

次に、大神良臣説について。「三大実録」によると、大神良臣は、余程善政を行い、領民から敬愛された有徳な人物であつたらしい。従つて、彼の薫陶を受けたであろう子孫には、領民を泣かせるような暴君は無かつたはずである。以上のように考へてくると、高德の人、大神良臣の子孫の中からは、あえて閉鎖的な臼杵深田に壮大な石仏群を造立しなければならぬような動機をもつた人物を探し出すことは困難である。

七、豊後大神氏はどこから来たか

これまで、多くの学者、研究者によって大神氏にかかわるあらゆる史料に対して、精緻な分析、検討が加えられたにもかかわらず、豊後大神氏の出自は明らかになっていないのが実状である。かつてイギリスの経験論哲学の祖、F・ベーコンは、自然界の真相解明のためには「自然を拷問にかけて秘密を白状させる」ことの必要を説いたが、豊後大神氏のルーツに関しては、どのように文献資料に拷問を加えてみても、なかなか真相を白状しそうにない。そこで、思い切って視点を変えてこの問題を考えてみると、また違った風景が見えてくるのではないかと愚考するのである。ところで、八幡神顕現の任務を命じられた大神比義の宇佐での居館は、現在の宇佐市乙女とも宇佐市荒木とも考えられている¹⁵。ところが、不思議なことに、大神比義の居館が任地の宇佐から遠く離れた豊後速見郡にもあったのである。大神比義がそこに、実際に居住していたかどうかは別にしても、この伝承は私にとって極めて衝撃的であった。

奈良時代に成立した『豊後国風土記』(七一三)によると、速見郡には「郷五所」があったことが記されているが、具体的な郷名の記載はない¹⁶。ただ、「和名抄」によると、速見郡内に「大神郷」の郷名があったことが明記されている。おそらく、『豊後国風土記』の「郷五所」の一つは「大神郷」であった、と思われる。地名辞典(『角川日本地名大辞典』角川書店)にも、文書としては残っていないが既に奈良時代には「大神郷」は存在していたらしい、と書いている。とすると、速見郡内に大神比義か、あるいは彼に所縁の人物が居住していたことが推定出来るのである。逆に住んでいなかった、と断定する根拠はないのである。

ところで、八幡神顕現の大任を大神比義に命じたのは蘇我馬子(生年不詳、六一六)であった可能性が極めて高い、とされる¹⁷。その馬子は、大神比義に対して八幡神顕現とは別に、もう一つのミッションを与えていたのではないかと、私は考えているのである。もちろん、文献上にはないがそのミッションとは、豊後国海部郡の「真朱」と他の鉱産資源に関する情報の収集であった。私が、このように考えるには次のような歴史的背景がある。

六世紀から七世紀の我が国には朝鮮半島から多数の人々が渡来し、我が国の政治、経済、文化に深く関与していた。日本の指導者達が彼等から学んだことは沢山あったが、中でもたいがい勢力に対し国内の政治、経済体制を整備するためには、国内の鉱産資源の開発を強力に推進することであった。そして同時に鉱産物の探鉱、採鉱、精錬、冶金の技術の習得であった。特に、鉄と並んで金、銅、錫、水銀（真朱）は仏教推進の時代的要請の中で重視された。五世紀頃、豊後国海部郡に君臨した龜塚古墳の主は、「朱の文化」の頂点を極めた人物であり、大和朝廷とも濃密な関係を保っていた。従って、豊後国の「真朱」の存在は早くから中央には知られていたのである。文武二年（六九八）の「豊後国真朱」（『続日本紀』）の記述は、その間の事情を雄弁に物語るものである。蘇我馬子が豊後国海部郡の「真朱」について高い関心を有していたことは、前述の観点から見て当然であり、従って大神比義に対して、右記ミッシェンを与えたとしても不思議はないのである。その蘇我馬子からのミッシェンを受けた大神比義の居館が、「赤湯泉」や豊後国海部郡を一望できる速見郡大神に存在することは何等不思議なことではなかった。速見郡大神に存在する大神比義居館の伝承は、ますますリアリティをもって私に迫るのである。

ところで、蘇我馬子のミッシェンを推進した大神比義に代わって、直接、その集団を率いたのは比義に極めて近い大神氏の中の一人であった、と思われる。任務遂行に当たって彼は、在地勢力との軋轢を避け、協力を得るために、大和三輪山の名家大神氏を名乗ったことは当然のこととして、時としては用明天皇のミッシェンであることを公言することもあったのではなからうか。このミッシェンが蘇我馬子の命である以上、これは国家意思であった。したがって、用明天皇と情報を共有していたはずであり、用明天皇の御名を旗印にすることに躊躇は無かったのではないか。彼と彼の集団が「真朱」を求めて上陸した地点は、おそらく、佐賀関半島から大野川河口にかけてであった。それも、現在の大分市坂ノ市日吉原海岸ではなかったか。大分市坂ノ市には、用明天皇御創建とされる、物々交換で有名な廣徳山萬弘寺がある。この寺の「縁起」によると、筑紫日向に「旅行中の用明天皇が急に病にかかったため、当時の「安萬郡日吉の邑」（現在の坂ノ市）に立ち寄られ豊国法師の祈願を受けたことが機縁となって萬弘寺の創建につながったというものである。⁽¹⁸⁾緊迫した当時の中央政界の中で天皇が大和を離れ、遠

く九州へ下向することなど信じ難いことである。察するところ坂ノ市の海辺は、古くから海上交通の要所であつたことを物語るものであり、ミッシヨンを受けた統率者が、用明天皇の御名を旗印として任務遂行に当たつた一つの痕跡ではないか、と愚考するのである。三重町内山に残る用明天皇伝承も、これと軌を一にするものと考えられる。

さて、坂ノ市に上陸した集団は大野川に沿って内陸の久所赤迫を経て、深田へ入つたのではないか。ここから、大野川と別れ大野郡へ入り、三重郷、緒方郷を経て、やがて姥岳（祖母山）に到達したと考えられる。その後、彼等は世代を重ねる中で大野郡に土着し、原野の開拓、農地の造成と併行して祖母山の開発を行い、在地勢力としてゆるがぬ地位を確立したものと推定される。そして、平安時代中期（一一世紀初め）頃、後に豊後大神氏の祖と仰がれることになる一人の傑出した人物の出現となるのである。

なお、祖母山（姥岳）の鉱産資源開発については、文献上明らかなのは、天文一六年（一五四六年）足利義輝の時、尾平山中小屋銀山操業に関するものである。大炊の助なる人物が神様の「御告」により始めた、という伝承がある。¹⁹ 林勝美氏も疑問を呈されているように神の「御告」による銀山開発とは信じ難いが、私は次のように考えている。

既に述べたように、大和三輪山の祠官であつた大神氏が祖母山に入った時点で祖母山は名実共に「神奈備」の山となつたのである。祖母山の開発者となつた大神氏による坑道跡や大神氏伝承が、神の「御告」として受け取られ、「大炊の助」による銀山操業のきっかけとなつたのではなからうか。

八、大神惟基は鉾山（祖母山）開発者で臼杵磨崖仏の発願者

国宝臼杵磨崖仏は既に平安時代後期には完成してゐたとされる。²⁰ この石仏群を発願造立したのは豊後大神氏であることは、現在では通説となつてゐる。その上、豊後大神氏の祖、大神惟基が平安時代中期（一一世紀初め）頃の人物であることも学者、研究者の間では一致した見解であることを考え合わせると、時代的には石仏の造立者としては大神惟基の可能性が最も高い。

ただし、彼に石仏造立に要する巨大なカネ（経済力）と石仏発願の確たる動機があつてのことである。

大神惟基は、その出生をめぐつては怪異な伝承(註)をまとつてゐるが、その伝承の真意は彼が姥岳（祖母山）の支配者つまり開發者であることと同時に自らのルーツが山と三輪山にあることを天下に周知させるところにあつた。大神惟基が祖母山の開發フロンティアであつた、とする見解の根拠の一つとなつてゐるのは、彼の幼名「輝大太」を、「銅大太」としてゐる古い豊後大神氏系図の存在である。彼は祖母山の豊かな銅、錫、銀などの鉱産資源と共に丹生郷深田や三重郷内山の水銀（真朱）をも支配し、巨富を蓄積したのであつた。

ところで、鉱山開発には、深刻な災害が伴うことは今も昔も同じである。落盤、鉱毒、有毒ガスによる犠牲者の多発は、鉱山開發者の彼を苦しめたに違ひないのである。加えて、怨霊思想が支配する当時の社会の中で彼の精神的苦痛は計り知れないものがあつたはずである。自らを精神的苦惱から解放し、多くの犠牲者の怨霊を鎮めるためには、壮大な磨崖仏の造立は彼にとつては必然の帰結であつた、と私は考えるのである。そうした意味から臼杵深田はまさに、鎮魂のための聖地であり、墓所でもあつた。（三重郷内山には、招福、除災、病氣平癒のための祈願寺としての蓮城寺の建立。）

以上で明らかのように、大神惟基には石仏造立の動機もカネ（経済力）もあつたのである。現在、豊後大野市三重町内山や臼杵市深田に語り継がれてゐる「真名長者」伝承とは、大神惟基がモデルであり、「真名長者」伝承の最深度を流れてゐるのは豊後大神氏のルーツに関する記憶であり、大和三輪山から豊後へ至る史実の投影ではないか、と私は考へてゐる。以上が、私が臼杵磨崖仏の前に立ち、耳をそば立てて石仏群から聞き取つたことの全てである。

九、結語にかえて

最後に、二つのことを付記してこの小稿を閉じることとしたい。

(一) 大分県地方では、「青大将」のことを一般的に、ヤータラ、ヤータレ、ヤータロ、ヤハタ、ヤタなどと呼ぶが、この呼

称は他県にはないようである。『日本方言辞典』小学館）ところが、他県では一般的な「ネズミトリ（へび）」という呼称は大分県には無い。

ところで、広大な豊前平野は古くから稲作が盛んであった。それだけにコメに対するネズミの害は深刻であった。だから、ネズミを追って家から家へ渡って移動する「青大将」は「ヤワタリ」と呼ばれ、豊前の農民からは親しまれ尊敬されていた。ネズミをひと呑みにする「青大将」の勇姿は、農民を畏怖させ畏敬の念を起こさせるのに充分であったのである。因みに大分県には「ネズミトリ」という呼称はなかったが、同じ意味の「ヤワタリ」はいたことになる。その「ヤワタリ」はいつしか「ヤータレ」とよばれるようになり、豊前（宇佐、中津）の農民の中に深く根を下ろし、農業の神として上着、土俗の信仰となったのである。宇佐地方に「へび」にまつわる伝承が驚くほど多いのは、理由のないことではないのである。郷土史家小野精一氏は、その著『大宇佐郡史論』（宇佐郡史談会）の中で、豊前宇佐地方に「へび」にまつわる伝承や伝説の多いことを指摘されている。

さすがに豊前国宇佐は「ヤワタ（ヤハタ）さま」のクニであり「八幡さま」のクニであるだけに、「へび」にまつわる伝承の多いのは右記の通りであるが、何といってもその中の白蛇は、「大宮司宇佐公通と白蛇」の伝承であろう。『宇佐市史（上）』によると次のとおりである。

公通卿が領民の旱害を救わんがために、井堰を造ろうと計画して齋戒沐浴、七日間断食で、鷹栖山腹の円通大師の堂に籠もり祈請をかけた。すると満願の暁に、「この宇佐川から白木の箱が流れ下る。その住る所に井堰を築け。その箱の蓋をとれば白蛇一二頭が出る。その往く所に随って渠を穿てば通水自由である」と言う夢の告げに接した。公通が夢覚めてみれば果たして白木の箱が流れている。今の井堰のある豊川でその箱が止まったのである。その蓋をとると白蛇一二頭がはい出たので、その行く跡を追うて渠をうがってゆく。二筋は四日市吉松で止まったのでこれを有瀬大明神に祀り、他の二筋はさらに進んで城井に止まった。今の有吉大明神はこれを祀ったのである。余りの八筋は八幡村森山に、すなわち公通卿の館のすぐ北方で止まっ

た。これが蛇田^{びた}神宮の祭神となったという伝説である。この三社とも平田井堰鎮護の神として、昭和の初年まで井手掛の村によって毎年霜月に、五穀成就の親齋会を行っていた。

蛇足ながら次のことを記してこの本稿を閉じることとしたい。

宇佐市大字森山の森山神社は、以前「蛇田宮」と呼ばれていた。おそらく、古くは「ヤワタリ」であったものが次第に「ヤハタ」、「ヤタ」、「蛇田（ジャタ）」となり、「蛇田（ヘビタ）」へと変化したのではなかったか、と愚考している。

(二) 平成一九年六月二三日、私は別府市内成を訪ねた。目的は二つ。その一つは、かねてから聞き及んでいた棚田の景観を満喫したかったことと、もう一つは大神峰神社に参拝することであった。私が大神峰神社のことを知ったのは、小玉洋美氏の「内成の民俗」(『大分県地方史』第六七号)によってである。そして、今回特に大神峰神社の参拝を思い立ったには理由があった。その理由とは、小玉洋美氏が、「内成の民俗(二)」に採録された文書にあった。その文書とは、元社家神尊勝男氏の所蔵文書でその内容は、大神峰神社鎮座の由緒に関するものであった。私の関心を唆ったのは、次の箇所であった。

「抑此山ハ往古大山祇命ノ鎮座ノ地也。人皇五十七代陽成天皇元



別府市内成 大神峯神社

慶元年六月ノ頃、一人老翁此山ニ来リ休シケルニ、御社有ケルヲ見テ此所ノ宮守弘太夫に問ケルハ、此所ニハ如何ナル神ヲ祭リ奉哉ト尋ラレケルニ、宮守大山祇命ヲ勸請ノ地ナリト答ケレバ、翁ノ云ルニハ、吾ハ豊前国宇佐宮大神比義命ノ苗裔大神道国ト云ル者也。此度速見郡近部庄ナル八幡宮ニ詣ケル。夫ヨリ豊後国遊覽ノ爲此地ニ来リ、此山ニ登リ見ルニ、清水四面ニ流レ殊ニ靈地ナレバ、暫ク此所ニ足ヲ止ントテ五七日滞リリケル。六月十一日ノ夜八幡宮道国ニ夢中ニ託シテ宣ク、此地ハ至テ清淨ノ靈地ナレハ、吾ヲモ此山ニ祭ラレト宣ヒケル。道国夢覺テカクアラタナル神託ヲ蒙ル事ノ有難サヨトテ、翌十二日宮守ニ語りテ共ニ力ヲ合セ八幡宇佐宮ヲ奉勸請也。(以下略)

文書によると、大山祇命の鎮座する神奈備の地内成へ元慶元年(八七七)大神比義の末裔大神道国という老翁が速見郡大神郷近部庄の八幡宮を拜した後來訪し、この地が靈地なることを知り八幡神を勸請した、というのである。文書中の「近部庄」とは、古くから大神比義の居館(古殿)があった、とされるところである。神尊家文書の学問的評価はさておくとして、大神峰神社への八幡神勸請が元慶元年(八七七)とする伝承はその創建の古さを物語るものである。実は私の強い関心もその点にあるのである。宇佐菱形池辺で八幡大神を顕現させた大神比義の誇り高き末裔が、余人ならいざ知らず、この時期に宮外において、しかも宇佐宮から遙か遠隔な内成の地で何故、改めて八幡神を勸請しなければならなかったのか。私にはいささか奇異に感じられたのである。そこで、今回の大神峰参拝となつたのである。社殿は、御園峠近くの深い森の中に鎮まっていた。私はそこで台地の記憶を聞きたかつたのである。

閑話休題。現在全国に鎮座する十一万余りの神社の中で、約四万社は八幡社であるとされている。そしてその総本社が宇佐市の宇佐神宮であることは言うまでもない。大神比義によって菱形池辺に顕現した八幡神はその後、朝廷の崇敬を得て、国家神としての地位を獲得するまでになった。ところがこれとは反対に、八幡神顕現に功績のあつた大神比義の子孫は、奈良時代後半以降、宇佐氏との大官司職をめぐる抗争に敗北し、宮外へ出ることを余儀なくさせられたのである。奈良時代の後半には既に、宇佐氏との確執が顕在化していたのである。そうした状況の中で、下級神官として宇佐氏に仕えることは比義の末裔と

しては潔しとしなかつたはずである。誇り高き比義の末裔は新天地を内成の聖地に求めるに当たって、速見郡大神郷近部庄の比義居館跡を拝し、祖靈の加護を祈り、改めて八幡神を勧請したのではなからうか。小玉氏によって「内成の民俗」に採録された大神峰神社の「ご由緒」は私に以上のようなことを想起させたのである。私は、宇佐宮外に出た大神比義の末裔の、痕跡を大神峰神社に垣間見たように思うのである。ある日突然老翁が内成に出現、夢の中に八幡神勧請の「託宣」を受けた、というのであれば、私の関心もそれほど強いものとはなり得なかつたであらう。しかし、比義の末裔大神道国という神官が比義の故地を拝した後聖地内成に来訪した、とする伝承に私は強いリアリティを感じるのである。なお、大神比義の居館が速見郡大神郷近部庄に存在していたという伝承は現在でも古老によって厳然と語り継がれている。本稿（七）の論拠もここにあり、そこを出発点としていることから明らかのように、私はこの伝承に高い客観性を直観しているのである。

八幡信仰史研究の権威、中野幡能博士は、『別府市誌』（六〇年版）「別府のあゆみ——大神比義と大神郷——」の中で、伝承として『豊後国志』などに伝えられているだけとしながら「豊後国速見郡大神郷のことはこの郷と宇佐の大神氏との関係がないとは考えられないだろう。」とされておられる。伝承を無視されない中野幡能博士の学問的態度には心から敬服させられるのである。

なお、この小稿の執筆に当たって、今回も又、前三回（「ほうちょうの風景」（平成一〇年）「朱砂と水銀」（平成一四年）「別府湾の蟹気楼 瓜生島」（平成一五年）と同様、参考文献の朗読の全てを中村喜枝子さんにお願ひ致しました。なじみの薄い専門書の朗読は一般の文学書とは異なり、興味索然であったと思われもしたが、こころよくお引き受け頂くことが出来ましたことを心から深くお礼申し上げます。朗読のご奉仕は一年以上にわたり、毎週日曜日、あるいはウィークデーの御前一〇時から一二時まで、あるいは午後一時から三時までを原則とし、大分県立図書館または大分市西部公民館でしておりますが、文献によっては三時間以上の長時間にわたり、ご奉仕を頂いたこともたびたびあったことを明記し深く感謝申し上げます。また、大分県立図書館の司書の皆さんにも格段のご協力を頂いたことを深くお礼申し上げます。

- (1) 重松明久校注『八幡宇佐宮御託宣集』現代思想社、以下『託宣集』とする。
- (2) 井上道泰『豊後風土記 新考』巧人社
- (3) 松田寿男『丹生の研究』早稲田大学出版部。なお、この「赤湯泉」とは別府市にある「血の池地獄」と推定されている
- (4) 中野幡能『大神比儀』『豊日史学』53の2・3
- (5) 植垣節也校注、訳『風土記』新編日本古典文学全集5 小学館
- (6) 岡村孝子『古代神祇新仰と仏教』—宇佐八幡宮の成立— 思文閣
- (7) 『宇佐市史(上)』、松尾剛男『大分の古墳と神社』 東九企画
- (8) 『東大寺大仏記』「東大寺造立供養記」『群書類従第24輯』続群書類従完成会
- (9) 『新潮日本古典集成 万葉四』
- (10) 『三輪氏』『日本史諸家人名辞典』
- (11) 中野幡能『八幡信仰史の研究』吉川弘文館
- (12) 『豊後大神氏の出自について 中野幡能氏「宇佐大神氏進出説」批判』『大分県地方史』七九号
- (13) 渡辺澄夫『源平の雄 緒方三郎惟栄』山口書店
- (14) 生山和四郎『宇佐宮と辛島氏』
- (15) 『豊後速見郡史』大分県速見郡教育会
- (16) 佐藤四郎『豊後風土記の研究』明治書院
- (17) 中野幡能『八幡信仰』塙書房、生山和四郎『宇佐宮と辛島氏』
- (18) 『萬弘寺縁起』萬弘寺、『白水郷(あま)』第二三号、第一五号 坂ノ市地区郷土史愛好会

- (19) 「斧石 林勝美先生遺稿」(尾平山・木浦山) 斧石 林勝美先生遺稿刊行会
- (20) 『国宝白杵磨崖仏保存修理報告書』白杵市教育委員会 平成九年
- (21) 「緒環」『平家物語(下)』新日本古典文学大系四五 岩波書店
- (22) 渡辺澄夫『源平の雄 緒方三郎惟栄』山口書店
- (23) 奥村登 昭和一九年生
- (24) 『速見郡史』『宇佐史談』『日出図跡考』など